

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報



あの町この町
フェルナンド・デ・ノローニャ Fernando de Noronha

特集 文協(ブラジル日本文化福祉協会)の新しい取組み

- ・文協：ブラジル日系社会の中心的団体
- ・文協の新たな挑戦の道筋



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

新規会員募集中！
詳しくは P21 をご覧ください。

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの町この町 フェルナンド・デ・ノローニャ [高嶋尚生]	3
ブラジル・ナウ サンフランシスコ河分水路プロジェクトの 現状をめぐって [編集部]	5
【特集】文協(ブラジル日本文化福祉協会)の新しい取組み 文協:ブラジル日系社会の中心的団体 [石川レナト]	6
【特集】文協(ブラジル日本文化福祉協会)の新しい取組み 文協の新たな挑戦の道筋 [ブラジル日本文化福祉協会理事会]	7
社会起業国際交流プログラム(SEED)体験談 [六浦吾朗]	10
ブラジル現地報告 日系人女性起業家 エンパワメントシンポジウムに参加して [コッペデひろみ]	12
連載・日系企業シリーズ コジロー出版と月刊ピンドラーマ [布施直佐]	13
連載・ビジネス法務の肝 知的財産権のライセンス契約に関する最近の動き [柏 健吾]	14
連載・勤どころ～税務&ホットトピック～ ブラジル国税庁 (Receita Federal) 2021-2022年 年次調査報告書について [天野義仁/三上智大]	15
エッセイ バンダ・マンダカリーニョ結成12周年 [八木美緒子]	16
ブラジルに暮らして ポルトセグーロ発サンパウロ行きバスのなかで [高橋寧緒]	17
ジャーナリストの旅路 和食恋しいリオの秋 [大月美佳]	17
連載・文化評論 天才的作曲家ヴィラ＝ロボスの画期的評伝を読む [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
キャンパス・コラム ブラジルから学ぶ首都移転 [向井ジョーン虎太郎]	19
新刊書紹介	20
連載・ブラジルあれこれ 在日日系人のための生活相談員セミナー	20



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「サンパウロの目抜き通りアヴェニダ・パウリスタ。その中程に赤と銀のオブジェが光る。高さ8.5m。作者は故トミエ・オオタケ。23歳で渡伯、40歳で絵筆をとり、ブラジルを代表する造形作家に。101歳で逝去後も作品は輝き続ける」

永武ひかる：ブラジル撮影約30年。著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。
www.hikarunphoto.com

あの町、
この町

フェルナンド・デ・ノローニャ Fernando de Noronha

南大西洋に浮かぶ楽園フェルナンド・デ・ノローニャは、ペルナンブーコ州の州都レシーフェから545km北東に位置する面積26km²の小さな離島。レシーフェから空路1時間強で着く。この島の歴史は16世紀の大航海時代まで遡る。ポルトガル王の援助を受け南米大陸東岸を南下していたイタリアの航海者アメリゴ・ヴェスプッチによって1503年に発見された。その後、イギリス、フランス、オランダなどによる占領、放置が繰り返されたが1737年にポルトガルが最終占領。18世紀の終わりには政治犯を収監する刑務所が建設されている。第二次世界大戦中は、米国海軍支援基地も設置された。戦後1988年、ペルナンブーコ州に統合されブラジルは漸く自然保護へと乗り出した。

エメラルドグリーンの透明度の高い海では、様々なマリンスポーツ、アクティビティをエンジョイできる。ダイビングは初心者から上級者まで楽しめるポイントがいっぱいある。気楽に潜りたい人はシュノーケリングでもウミガメに遭遇できる。イルカウォッチングでは遊覧ボートを追いかけて海面を楽しそうに駆け抜けるイルカが観られる。早朝にサメウォッチングができる岩場もある。最高のサーフィンエリアもありハイシーズンの12月から3月には国内外からサーファーが集まる。島を周遊したいならレンタルのオフロード・バギーで走ると気分もぐっと盛り上がる。

この島は2001年に世界自然遺産に登録され、エコツーリズムの先進地としても有名。自然の美しさを保つため動物保護のために環境保全税なるものが設けられている。入島の際、空港で滞在日数に応じて1日あたりR\$ 92.89 レアル (約=約2,300円。2023年度)の支払いが義務付けられる。入島人数の制限もある。実際、環境保全は大変厳しく管理され、ブラジルには珍しくゴミは全く落ちていない。生活ゴミはすべて処理工場に持ち込まれ分別され、リサイクル可能なもの島内で処理されるが、残りは船でレシーフェに運ばれ最終処理される。また、「天然のプール」と呼ばれる岩場の磯はたくさんあるが、浅いところではサンゴや他の海洋生物を足で踏まないように常に水面に浮いていることが求められ、浮きベストの着用が義務となっているケースがある。監視員も見張っていて、自然保護は徹底している。

この離れ島にいと、どこか他の国のビーチリゾートに来ているような錯覚をおこす。おしゃれなボウザー(リゾート民宿)に泊まって、ゆっくり流れる時間の中のんびりと過ごす。昼間は海で遊び、新鮮なシーフードも堪能して、夜は星を見上げて波音を聴きながら静かに体を休める。1週間ほどステイするとほんとうに身も心も休まる。



高嶋尚生 (協会理事)

広島から Tudo Bem?

ブラジルとの繋がり磨き直す 平和記念碑を会員らが清掃

会員有志が集い、市内に流れる川のほとりにたたずむ記念碑の清掃作業を3月18日に行いました。この碑はブラジルの国土を型どった黒御影石でできており、高さ約2メートル、最大幅約1.6メー



▲清掃後に記念撮影

本場の技、学びブラジルへ 神楽団メンバーが継承に意欲

ブラジルの広島県人を中心に活動するブラジル神楽団（1970年結成、会員15人）のメンバー3人が本場の技術を学ぶため、JICA（国際協力機構）日系社会研修生として1月12日から、常設舞台のある広島県安芸高田市の神楽門前湯治村に滞在、練習に励みました。

ブラジルに移住した広島県人が故郷を懐かしむため始めた神楽は島根県人も参加し、一世を中心に活動していました。2005年からは二、三世、非日系人も参加し、日本の文化継承を担っています。日本との交流も盛んで、13年には島根県益田市ワールド神楽フェスティバルに参加、JICAでの研修は17、19年に続き3回目となります。

「雪を初めて見た」というモスタツ・パーホス・ワグネルさんは、日本の気候や生活からも様々なことを学んだようです。「母親の勧めで神楽を始めた」（笹木エミレ良江さ

トルで「祈平和 BRASIL」と彫られています。

1990年にブラジル広島県人会（現ブラジル広島文化センター）、ブラジル長崎県人会などが募金活動を行い、広島市に送ったものです。戦後に移住した人の中には、多くの被爆者がいました。ブラジルではかつて被爆証言を語る活動などもあり在外被爆者を支援する団体もありましたがすでに解散しています。

建立当時、約160人いたというブラジルに渡った広島や長崎の被爆者の思いと、平和を通して両国を結ぶ願いが込められています。

会員らはホウキや雑巾を手に取り、約1時間清掃活動を行い、懇親昼食会を行いました。辻井克利事務局長は、「コロナで3年間実施できず数人で行ってきたが、今後は会員の懇親も兼ねて毎年開催していきたい」と話していました。

ん）、「物語の主人公のことをもっと知りたい」（宮原カリリーナ綾さん）らは、神楽にすっかり魅せられたようで、帰国後の活動に意欲を見せていました。3人の奮闘をねぎらうため、広島市内のレストランで食事会を開催した広島日伯協会の田中会長は、「ブラジルでしっかりと広島の文化をアピールしてほしい。今後の活動も応援していきたい」とエールを送りました。3人は地元の小学校での交流なども楽しみ、2月25日に日本を発ちました。



▲練習を重ねた神楽を披露後、記念撮影



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020—）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



サンフランシスコ河分水路プロジェクトの 現状をめぐって

カルロス・ラセルダの サンフランシスコ河論を再読する

カルロス・ラセルダ（1914-1977）は、1940年代から70年代にかけて活躍した、ブラジル政界を代表する政治家にしてジャーナリスト・出版社経営者であったが、とりわけジェツリオ・ヴァルガスの政敵として有名だった。その保守派がリオ（当時はグアナバーラ）州知事であった1964年に出版したのが、「Desafio e Promessa - O Rio São Francisco」（挑戦と約束—サンフランシスコ河）というサンフランシスコ河の近代化をいささか過激に論じた著書であった。このほど再読したので、この本の背景について要約的にメモしてみよう。

反共政治家として有名だったラセルダも若い時はバリバリの коммуニストで、逃亡奴隷王国パルマールレスに関する論文を発表するような戦闘的左翼活動家であった。1937年警察に追われる身であった彼は同志たちとペロオリゾンテへ逃げたが、そこで「サンフランシスコ河を下ってパイアへ入ろう」との提案を受け、即実行することに。28日間の船旅の末、中流域のジュアセイロに到着、共産党の仲間たちの歓迎を受けてから、鉄道でサルヴァドールへ移動するが、そこで逮捕されてしまう。

こうした若き коммуニスト時代の旅の実体験を通じて、サンフランシスコ河の有する国家的重要性・可能性を発見・認識した彼は、二年後の1939年経済誌に紀行文的論文を発表する。その25年後、この論文を一冊の著書として刊行することになる。その前書きでは、「若書きなので、この本のなかで書いた基本的なものの見方を修正する必要性を痛感しているが、サンフランシスコ河への熱情、ブラジルの発展におけるこの河の重要性の認識、という二点がこの本を貫いており、この熱い思いは今でも私の心の中で生き続けている。だからこそ、この古い論稿をそのまま再出版することを決めたのだ。」と書き出している。

この河がブラジルという国家形成にどれほど重要な役割を果たしたか、と様々な歴史書や資料を読みながら、この「国家統合の河」について熱く語っていく。その最終章の結語は「旱魃などのノルデスチ問題を解決するには、灌漑事業だけでなく土地所有制度の再編成、すなわち封建的諸制度の改革が必要だ。生産活動を創出し、経済を発展させるためには文明のレベルを引き上げることも必要だ。サンフランシスコ河を近代化すること、文明の中にこの河を組み込むこと、これがプログラムだ。」というものだ。

今から80年以上前に書かれた文章だが、ラセルダのサンフラ

ンシスコ河近代化必定論はまだまだ十分説得力を有している。

灌漑計画と サンフランシスコ河分水路プロジェクト

ミナス州カナストラ山地に源を発し、パイア内陸部を経てアラゴアス州とセルジッペ州の境界を流れて大西洋にそそぐ、全長2,830km、流域面積63万km²という南米第三の大河（一位アマゾン河、二位ラプラタ河）がサンフランシスコ河である。流域で暮らす住民たちは、この大河を擬人化して「Velho Chico（フランシスコ爺さん）」という愛称を付して親しんできたが、この河の中流域における平均流量3,000トン／秒という膨大な水量を活用した諸事業（水力発電、治水、灌漑事業など）を通じてノルデスチ経済の近代化が試行されてきたことは周知の通りである。

ノルデスチ内陸部乾燥地帯と地理的に重なり合うサンフランシスコ河中流域における灌漑農業フロンティアは、「南米最大の人造湖」を生み出したソブラディーニョ・ダムが1978年に竣工してから開発が本格化し、今ではマンゴ（年産50万トン以上）やブドウ（年産約30万トン）などの熱帯果実類の一大生産地に変貌している。

こうした灌漑農業をさらに多くのノルデスチ内陸各地に拡大しようとの構想も19世紀から練られていたが、その具体案というのが、transposição（直訳は移送となるが分水路のこと）であり、軍事政権時代から始まって歴代政権のどれもが様々な試案を検討してきた。実際の工事が始まったのは、第二期ルーラ政権の2007年で、「北分水路」と「東分水路」を合わせると全長700kmという大土木事業となり、その工事予定額は当初45億リアルで2012年には完工するはずだったが、未だに工事は終了せず、既に120億リアルも費やしている。

この未完成の分水路全体のメンテナンスコストは、既に年間3億リアル（約75億円）となっているが、「受益者負担」でペルナンブーコ、パライーバ、リオグランデ・ド・ノルチ、セアラの4州が負担すべしと前ボルソナーロ政権が決定した。が、いずれの州も「ない袖は振れぬ」貧乏州であることから連邦政府（現ルーラ政権）とのこれからの交渉は難航すると予想されている。

この現状を、総合誌VEJA(3月1日号)は「Seca Financeira」（財政的旱魃）というタイトルの記事で淡々とファクトを記していたが、この皮肉っぽいタイトルにニヤツとした読者は少なくなかったと思われる。『ブラジル特報』編集部

文協： ブラジル日系社会の中心的団体



石川レナト
(文協会長)

文協（ブラジル日本文化福祉協会） 誕生の経緯

ブラジルに到着した日本人移民の軌跡には、常に一つの中心的な団体が基本的な役割を果たしてきた。戦後の混乱期である1950年代、一部の指導者は、既にブラジルの地に根を下ろし、同時に祖国との関係を再構築する必要があったこの日系社会に対して、同胞間の対立を克服し、一つの方向性を示す方法を模索した。

このような複雑な状況の下、1955年、サンパウロ日本文化協会（1968年にブラジル日本文化協会、2006年にブラジル日本文化福祉協会と改称）が、ブラジル日系社会の中心的存在として、また、3年後の「ブラジル日本移民50周年」の開催という重要な使命を帯びて誕生した。

この果敢な挑戦は、ブラジルでの日本人移民とその子孫のプレゼンスの第二段階が始まる時機に、消し去れない足跡を残すことに成功した。

1964年、協会はサンパウロ市中心街の一室からリベルダーデ地区の本部へと移転した。こうして、文協と通称される当協会はまもなく70歳を迎え、その活動は全国に広がり、日伯交流の主要行事（各種記念行事、両国要人の往来等）やブラジル日系社会の代表的な出来事を主導してきた。

現在、文協は、9階建ての本部ビルの他、ブラジル日本移民史料館（文協ビル7-9階、1978年開館）、日本館（サンパウロ市内イピラプエラ公園内、1954年建設）、文協国土館公園（サンパウロ州サンロッケ市、1997年に国土館大学が寄贈）の運営管理を担っている。

文協の使命

文協の基本的な使命は、ブラジル日系

社会の代表として、ブラジルにおける日本文化の伝承と普及、そして、日本におけるブラジル文化の紹介と普及を推進することである。そのために、協会は、様々な年間プログラムを精力的に策定しており、毎年、約180件の文化イベント、表彰式、レセプションなどの各種事業を、32の委員会で活動するボランティアを通じて実施している。

また、もう一つの重要な使命は、大陸的規模の広い国土を持つこの国の各地域にある400以上の日系団体を巻き込んで、全国レベルでの活動を強化することである。32人の地域理事（現在は29の団体代表が活動中）がおり、2カ月に1度の理事会で地域の活動状況を報告している。また、文協の代表は、各地域のイベントについて、可能な限り、運営への参加や現地訪問を行なうよう努めている。

地理的な距離の問題や各地域の特殊な状況を克服し、地域のリーダー達との緊密な関係を維持するための努力が続けられている。

文協の社会福祉事業

文協は、日本文化の発信とともに、高齢者の社会的支援にも力を入れ、高齢者の生活向上と心身の健康保持のための諸施策を確立し、日常生活の中で積極的な役割を担っている。また、政府レベル（市町村、州、連邦）の援助手段を利用するためのガイダンスも行っている。

新しい世代と非日系人の参加

最初の日本人移民到着から115年、文協誕生から68年という節目の年に、各団体に共通する悩みは、「新しいリーダーへの継承」である。即ち、若い世代に対して、如何にして日本文化に関わってもらえるか、また、どのような条件を

整えれば、我々の組織の将来の道を担ってもらえるか、ということである。

現在、現役世代でリーダーシップを発揮できる能力を備え持つ日系ブラジル人は、その大半が、3世と4世の日系人で構成されており、彼らは、教育水準が高く、非日系人との婚姻が進んでいることを強調しておきたい。

第二、第三の言語を学ぶにしても、日系人は日本語よりも英語やスペイン語を選択する。確かに、日系企業を含む多国籍企業では、重要なポストで働くには英語をメイン言語として採用しているため、良い仕事を得る機会が多いからだ。

一方、非日系人による日本文化及び日本語への関心が高まりつつあることも事実であり、この「逆の傾向」に注目すべきである。

このような状況は、日系社会があらゆる領域や分野でブラジル社会と完全に調和しながらも、日本人の祖先から受け継いだ資質が際立つという付加価値とともに、発展していることを意味するものである。

当協会が誕生して70年を迎えようとしている今、社会の状況や人々のニーズが変化していることは明らかである。そして、その課題は益々包括的なものとなり、単なる「ブラジル日系社会のための団体」という枠を超えた活動が求められている。文協は、日系社会の中心的団体としての存在を放棄することなく、設立当初の目的を引き継ぎ、常に革新を続けつつ同時に伝統を守りながら、文化を次世代に伝え、ブラジルと日本の関係をより強固にする役割を担っていく所存である。

（註：石川会長は、現在85歳、日系二世、経済学士。NEC do Brasilの社長、Ericsson Brasilの取締役を歴任。不動産、コーヒー、畜産の分野で実業家として活躍。2012年から19年までサンタクルス日本病院の理事長を務めた。）

文協の新たな挑戦の道筋

ブラジル日本文化福祉協会理事会

コロナ禍とデジタル新時代

コロナ禍が世界を社会的孤立に追い込んだ2020年3月、文協では、第13回文化祭りー日本文化紹介を目的に一般市民を協会本部に招待する行事ーの準備を進めていた若者達は、パニックに陥った。未知のウイルスへの恐怖に加え、既に予定されていた行事の実施が危ぶまれたからである。

このエピソードは、今となっては、パンデミックに立ち向かうための道標となるとともに、文協の活動にとっての新たなステージの始まりとなった。

事件からちょうど2カ月後の2020年5月23日、24日、「文化祭#アットホーム」のライブ配信が行われた。日系ブラジル団体による初のオンライン・フェスティバルであり、驚くことに、その視聴回数は22,013回を記録した（2021年05月のデータ）。

デジタル技術に最も精通している世代である若者達を主役とするオンライン事業の成功には、協会の先輩達のサポートが不可欠だった。

こうした背景のお陰もあって、この新機軸は、協会及び日系社会のメンバー間の交流（たとえバーチャルでも）の選択肢として、急速に取り入れられるようになった。

新しい技術を使いこなすのは簡単ではなかったが、最終的に使いこなすことができるようになった。そして、これこそが、文協が現下の新たな挑戦に立ち向かうための重要な質的飛躍となった。

関係性と若者世代

2019年4月、文協の会長に就任した実業家の石川レナトは、「関係性の強化」と「若者の参加促進」の2点をその優先的な目標に掲げた。

1955年にブラジル日系社会の中心的団体として設立された文協は、国内各地の日系団体（現在400団体）

及びラテンアメリカ各国の日系団体との関係を強化するとともに、日伯交流を深めるための活動を恒常的に行ってきた。

当初、パンデミックは障害となったが、別の選択肢ももたらした。情報科学に精通した若い世代が、諸先輩達をリードして文協に新しいツールを導入し、日系社会全体を巻き込んだアイデアやプロジェクトを推進する理想的な環境を作り出した。

▼2020年世代プロジェクト



例えば、オンラインで文協の理事会が開催され、悲願であった全伯日系団体会議も可能となった。2020年6月11日、最初の全伯オンライン会議には、32人の地域理事（全国各地の団体の代表者）のうち28人がリモート参加した。地理的な距離を克服することができたこのバーチャル会議は、その後も定期的に開催され、コロナ禍が収まってきた現在でも、対面形式での会議と並行して、会議は基本的にオンライン（ハイブリッド方



▲文協本部 サンパウロ市リベルダーデ区（1964年落成）



▲ブラジル日本移民史料館
アリアンサ移住地定礎銘

式）で続けられている。

文協の日常は、関連団体との関係強化や活性化のための戦略的プログラムの開発に若い人たちの参画が増加していることで、新しい輪郭を帯びてきている。そのような事業のいくつかを紹介したい。

・FIBー文協統合フォーラムー

2007年に始まった最も古い事業で、ブラジル全土から新しい才能やリーダー

を集め、各地の日系協会の存続・発展のためのコンテンツを発掘することを目的とするものであるが、若者たちの参画によって新たな勢いが生まれている。このエネルギー活動(毎年開催。全国各地から平均150人が参加し、オンライン版では視聴回数5,500回を記録)は、良い結果をもたらしている。2022年の第14回大会は、サンパウロ州の5地域の他、地域のニーズに即してゴイアニア(ゴイアス州)、サルヴァドール(バイア州)でも地方版フォーラムが開催された。文協は、事業実施に協力するほか、講師派遣などを通じて参加している。

・文化祭り

冒頭で紹介した「文化祭り」は、日本文化の様々な側面を紹介する(そして巻き込む!)ことを目的とした、若者を対象としたイベントとして定着している。毎年、文協ビルで開催されるこの祭りは、週末に1万人近くが集まる。

・文協TV

若年層をターゲットとする戦略の下、2021年に、JICAの資金援助により、日本文化や移民をテーマにした21の番組を放送する文協TVがスタートした。YouTube/文協デジタルチャンネルで毎週放送され、最初の半年間のシーズンの総放映時間は735時間、視聴回数は39,854回であり、今年3月に第2シーズンがスタートした。

日系人の価値観の再生と対外発信

・世代プロジェクトと8つの価値観

もう一つの注目すべき事柄は、2018年にハワイ(米国)で開催された日本人ハワイ移民150周年を記念する「第59回海外日系人大会 in ハワイ」に、15人の若い日系ブラジル人代表団が参加したことである。この大会に触発された参加者は、他地域の青年部とともに、ブラジルにおける日系人の価値を確認するための会合を複数回開催した。2020年、この「世代プロジェクト」は、ブラジルの10都市で17件のワークショップが



▼桜祭り 文協国士館公園(サンロケ市)



▼文協農村委員会 ペトロリーナ葡萄酒畑訪問



開催され、様々な年齢層から500人以上が参加した。

これらの会合の結果として、日系社会で古くから実践されながらも、日常的にはあまり口にすることのなかった一連の価値観を確認することができた。ワークショップ参加者が口にした数々の言葉は、「誠実」、「忍耐」、「協同」、「感謝」、「親切」、「尊敬」、「責任」、「学習」という8つの価値観に集約された。以来、世代プロジェクトのメンバーは、様々なイベントに参加し、これらの価値観を強調し、その継承を奨励する活動を行っている。

・ネットワーク・プロジェクト

この事業は、文協の新たな挑戦の一環として、在サンパウロ日本総領事館の支援により、創設されたもので、日本で就労、居住する若者の連絡網を確立・強化し、ブラジルと日本にいる若者達の活動状況に関する経験や情報の交換に資することを目的とする。2019年10月に80名の参加を得て開催された第1回、続く第2回とも、教育、職業キャリア、起業を主要テーマとして、2020年からはデジタル形式で開催されている。

世代プロジェクトとネットワーク・プロジェクトはともに、日本に住む若者と

▼2017年文化祭り、書道のワークショップ



ブラジルの若者を巻き込み、日伯交流の新たなステージの基礎を作るための指針となるものと、我々は信じている。

2022年11月に石川レナト会長が訪日し、駐日ブラジル総領事館幹部及び複数の在日ブラジル人コミュニティの代表と面談した結果、この2つのプロジェクトを日本でも実践したいとの考えに確証が得られた。石川会長は、「ブラジル人労働者達が直面している過酷で複雑な現実を少しでも緩和できるプロジェクトを推進すべきとの思いを強くして、帰国した。」と述べた。

新しいリーダーへの道

文協では、幹部職の若手への円滑な継承に特に留意しており、先輩達は、何よりも協同を重視したリーダーシップを発揮するために必要な知識や能力を伝える

義務があると自覚している。

最近では、多くの若者たちが、幾つかのイベントの調整だけでなく、「芸能祭」(1964年から毎年6月に開催、日本移民記念

日の関連行事)や「桜祭り」(サンロケ市の文協国士館公園で1997年から毎年7月に開催)などの協会の伝統行事実施にも協力しており、先輩達が長年にわたって蓄積した知識を共有している。

この関連で、多くの場面で、文協の若者たちと他の関係団体、具体的には、サンパウロ州内や他州の日系団体、県人会、元留学生、非日系人の人々との共同作業が、調和のとれた共存の雰囲気の中で行われていることも興味深い。

また、機能面でも、新世代のリーダーを育成するための環境整備を図ってきた。現理事会(任期2021/23年)では、50歳未満の理事の人数が過去最多で構成されている。文協及びその他日系ブラジル団体の歴史的文脈においては、若者が主体となってきている、という事実は

▼2022年「国際日系人対話イベント」ペルー・リマ



大きな前進である考えることができる。

更に、文協では、海外の同種団体との経験の共有と集積についても特別な努力を払ってきた。一例として、2020年11月にブラジル日本移民史料館が主催し、カナダ、アメリカ、メキシコ、ペルー、ボリビア及び日本から専門家や代表者がオンライン参加した「第1回日本移民史料館国際シンポジウム」を挙げたい。また、2022年7月にリマ(ペルー)で開催された「第一回国際日系人対話イベント」には、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、メキシコ、パラグアイ、ペルーの代表者が一堂に集まった。

そして、2022年は、海外、特に日本のパートナー達との関係緊密化を追求しようとの協会の意思を強調するべく、石川レナト会長と故秀島マルセロ副会長が、11月13日から29日まで日本を訪問した。

新たな課題を前に、文協の活動は、日本文化の伝承と普及に取り組むすべての日系諸団体にとっての中心的団体であり続けることを目指していくが、指導部刷新の必要性はもとより、文協の対外関係は地理的境界を越えて拡大・強化していくことを基本方針として、これからも行動していきたい。



(註: 編集部訳、原文はポルトガル語)



▲FIB 文協統合フォーラム 2019年



▲2017年芸能祭 長崎蛇踊りの入場

社会起業国際交流 プログラム(SEED) 体験談



六浦吾朗
(一般社団法人ごろ夢
代表理事)



浅野麻里
(一般社団法人ごろ夢
シニアマネージャー)

SEED プログラムとは

一般社団法人ごろ夢 (<https://gorom.org/>) では、日本とラテンアメリカの大学や NGO と連携した国際交流によって、若者たちが共同でより良い社会を作るための活動している。そのうちのひとつが、SEED プログラム (Social Entrepreneurship Empowerment Development Program) である。このプログラムでは、日本とラテンアメリカの学部生たちが約半年間に渡って、オンライン授業とグループワークを行い、チームで社会課題の解決につながるビジネスの市場調査を行い、仕上げとして12月に日本へのスタディツアー(2週間)を通じて、実際の事業者へ社会ビジネスの提案を発表するというもので、大学生にとっては通常の授業とは異なって様々な国籍と専門性を持った若者が一緒に地域社会問題を研究し、地域経済に貢献する実践的なビジネスモデル立案の経験ができる画期的なプログラムである。2022年は、ごろ夢の協定校である3カ国から、4大学(ブラジルから ESPM 大学、アルゼンチンから Austral 大学、コロンビアから Los Andes 大学と EAFIT 大学)と、日本から合計24名の学生達が本プログラムに参加した。

メインテーマは地方創生

今回の Social Entrepreneurship のメインテーマは「地方創生」である。日本全国でも高齢化が進む山梨県を舞台に、山梨県の伝統特産品である酒、ワイン、ジュエリー、そして食文化の4つの事業について、後継者不足による地場産業の活性化についてチームに分かれて市場調査を行い、ビジネスプランを提案した。どの事業者も南米への市場開拓に関心があり、学生たちは、南米市場への開拓に向けた具体的な提案を半年間かけて練り上げた。事前準備の段階から、各

事業者の方々には、各々の事業に関する情報提供や学生からの質問の受け答えに協力していただき、学生たちは、出発前には大枠の事業提案をまとめることができた。事前準備の段階で調査した内容は、以下の通りである。



お酒とワインの2チームは、それぞれの商品を南米市場に輸出する際に役立つ情報収集を行なった。要は市場性のリサーチである。ブラジル、コロンビア、アルゼンチンの3カ国での市場規模、競合他社が活用している効果的な流通方法、南米市場参入への SWOT 分析、消費者アンケートなど、幅広い情報を収集し、分析結果をまとめた。リサーチ指導者からのアドバイスをもらいながら、実際の酒やワイン事業者が求めている情報を盛り込むよう細部まで気を配って企画書案を準備した。



ジュエリーチームにおいては、事業者の伝統工芸技術を活かしたジュエリー制作体験を外国人観光客に楽しんでもらうための戦略やマーケティングについて検討した。参加南米3カ国及び日本の人口統計や政治経済状況、外国人観光客のターゲット層や理想の価格帯などを比較分析し、彼らの消費者行動を裏付けるための関心、購入までの動機について明らかにした。そこから得られた考察から、事業者に役立つマーケティング戦略をまとめた。



食文化チームは、他のグループとは少々異なる課題を与えられた。それは「果物加工業者がいつも捨ててしまう桃の種を活用した新しい商品開発」というものであった。日本の「もったいない文化」をもとに、通常廃棄になってしまうモノから何らかの新しい価値を生み出す、ゼロからイチを生む発想である。桃の種を活用した新商品を考案し、それを南米市場で販売する際の市場性を調査した。商品開発の段

階では、専門知識がない中で新商品開発をしなければならないので、他国で類似したケースがないかを調査しながら検討を進め、その商品をどの国でどんな販促を行うかについても考えた。

こうして、それぞれのチームが事前調査を行なった末、2022年12月スタディツアーとして南米の学生と引率の教授達が来日した。当時はコロナウィルスの影響で日本が厳しい水際対策を行って



おり、学生の来日が直近に至るまで確定できず、非常にストレスを感じる毎日であった。2週間のスタディツアーでは、最初に東京を訪れ、各南米参加国の大使館、日本の外務省、JETRO、JICA、IDB アジア事務所をはじめ、ラテンアメリカとの事業で活発な企業や大学、NPO 法人なども訪問し、活発な意見交換を行った。ブラジル中央協会訪問は、同協会の紹介によるモンゴル開発銀行に訪問して、ブラジルとの国際ビジネス専門家の方から現場の話を聞くことができた。

山梨での現場見学

その後はいよいよ本番。山梨に移動し、各生産者の実際の仕事現場を見学し、様々な質問をさせていただき、業務についてより理解を深めた。

酒チームは、酒の製造工程について見学したあと、実際に南米市場に展開する際の酒瓶のラベルデザイン案やブラジル向けにカスタマイズしたカクテル案など

▲ブラジルからの学生たちのモンゴル開発銀行への訪問



を紹介し、事業者から効果的なフィードバックをもらうことができた。

ワインチームは、甲州ワインの歴史や特徴、製造工程などについて伺い、気候変動からぶどうの品種の多様化が求められていることも発見した。学生からは南米市場で気に入られるラベルデザインやワインの味の好みなどを紹介する機会を持った。

ジュエリーチームは、山梨で200年続く伝統的な宝石加工技術を見学。伝統技法から生まれる現代的なジュエリーを目の当たりにして、ジュエリー製作体験を元にした観光アイデアをさらに具体化してきた。

食文化チームは、甲府市内のスーパーマーケットや卸市場を訪問し、農作物が実際に売られる現場を見学した。担当者には日本における農作物の流通、食品規格、食品廃棄物に関して質問し、今後の農業の在り方についても議論できた。例えば、サステナビリティのトレンドに乗じて、消費者、流通者、生産者がそれぞれが満足するビジネスモデルについても検討する機会を得られた。

最終成果の発表

それぞれの現場見学が終わった後は、最終成果発表会。各チームの持ち時間20分という制約の中で、これまでの調査内容と事業提案をかなり凝縮した形で発表した。



日本酒チームは、まず酒業界における重要な課題一酒生産と消費減少が、海外への事業展開によってどのように解決していけるかを伝えた。さらに、ラテンアメリカ内で実施した市場調査アンケート結果を踏まえて、ブラジル、アルゼンチン、コ

ロンビアにおけるアルコールの嗜好、消費レベル、酒に関連するトレンド(例えば、日本食ブーム)について紹介し、なかでもブラジルの市場性が秀でていることを話した。現在の業界のアプローチや政府の支援についても紹介し、最後には、競合他社から差別化した付加価値をつける案として、2種類のターゲットに向けたラベル案や新しいカクテル案を紹介した。



ワインチームは、アルゼンチン、ブラジル、コロンビアにおける日本ワインの可能性、中南米市場への参入方法、生産者のワイナリーでのワインツーリズム開発の可能性についてプレゼンテーションを行なった。ラテンアメリカのワイン市場において、日本のワインはまだ認知されておらず、ポジショニングを確立していない。しかし、様々な産地のワインを好むハイエンドな消費者をターゲットにして、日本のワインのプレミアムさを強調したブランディングにすることで、この市場に参入するチャンスがあると説明した。

また、海外進出を目指す際の、ユニークで魅力的なラベルやパッケージのデザイン(例えば、日本さを強調)、ハイエンドな消費者にたどり着く流通先などを提案した。



ジュエリーチームは、山梨のジュエリー業界の歴史とその価値、そして業界におけるステイクホルダーたちを明らかにした上で、消費者アンケートを踏まえたマーケティング、プロモーションのアイデアを発表した。消費者から実際に関心を持たれている「体験」を体系化したビジネスにすることで、いかに持続可能で需要のある事業を展開できるかを説明した。また、どのようなブランディング戦略を行えば、国内外両方の市場においてより効

果的な宣伝も行えるかを提案した。合わせて、山梨ジュエリーのプロモーションビデオも制作し、日本人と外国人の両方から見た山梨のジュエリーの魅力を伝えるビデオを紹介した。



食文化チームは、山梨県の果物加工業者で多くの廃棄となる「桃の種」をもとにした、収益性の高い持続可能なビジネスアイデアを考案した。この新商品をラテンアメリカに展開するための市場調査の結果を踏まえ、廃棄になる桃の種をピーチシードオイルに転換して販売することを提案した。実際に作られたオイルは、そのまま販売するのではなく香水や化粧品などの美容製品に入れたり、プラスチックやゴムなどの加工品から発生する臭いをピーチシードオイルでマスキングするために活用したりなど、この事業の幅広い可能性を説明した。

上記の全4チームからの発表は、現地生産者の方々をはじめ、山梨県庁や山梨県メディアにも取り上げられた。NHK 甲府放送局と UTY テレビ山梨では当日の発表の様子が夜のニュース番組で紹介され、山梨県内でもラテンアメリカと日本の国際交流に対する理解が深まった。実際に発表を聞いた方々に感想を聞いたところ「ラテンアメリカ市場について予想していたことの再認識と、新しい発見があった。地域経済をよくしていくには、絶対に広い市場を狙わないといけないが、ラテンアメリカにはその期待をできる市場性があると思った。」「私たちでは考えつかないような新しいアイデアをもらい、とても有意義だった。」「自分ではなかなか手が出ない市場調査までしてもらい、とても感謝している。」などのコメントを得ることができた。山梨県内の事業者からは、ぜひ今後もこの活動を続けてほしい、という声もいただいて、今年以降も継続していくための大きな収穫が得られた。この SEED プログラムの経験を通じて、日本とブラジルの若者が今後の日伯の橋渡し役として活躍してくれることを期待したい。



◀最終成果発表の内容をチームで最終調整

日系人女性起業家 エンパワメントシンポジウム に参加して



コッペデひろみ
(音楽家、在伯青森県人会副会長)

3月14日の午後7時、国際女性デー（3月8日）を記念した「SDGs(持続可能な開発目標)ビジネスを通じて世界を変える：日系人女性起業家エンパワメントシンポジウム」がJICA ブラジル事務所（江口雅之所長）主催でサンパウロ市のホテル・ラディソン・パウリスタで開催された。

ブラジルからは女性起業家やリーダー。ポリビア、ペルー、メキシコ、パラグアイ、アルゼンチンから女性リーダーが参加し、オンライン会議アプリ「ZOOM」でも中継され、日本語、ポルトガル語、スペイン語の3カ国語同時通訳付きのハイブリッド型イベントとなった。

まず、これまで日系女性の起業家支援に焦点を当てた取り組みはなかった。そのため私自身、かねてより注目し参加することを非常に楽しみにしていたシンポジウムだ。

シンポジウム冒頭では、昨年末から年始にかけて来伯し、ルーラ大統領の就任式やブラジルの日系社会との懇談会に出席した小淵優子衆議院議員のビデオメッセージが紹介され、「ブラジルで活躍される日系女性の皆様の活躍を日本から応援している」と激励の言葉を贈った。

基調講演は日本から参加したエシカルジュエリーブランド「HASUNA」の創業者・CEOである白木夏子さんだ。

エシカル(英: ethical)とは「倫理的な」という意味の言葉で、エシカルジュエリーとは、採掘から加工、流通販売の全工程を人や環境に配慮した体制で生産したジュエリー（宝飾品）を指す。国連は持続可能な社会を実現するためSDGs目標を定め、ブラジルでもあらゆる分野で社会問題解決を支えるビジネスが立ち上げられている。

白木さんは、2009年にエシカルジュエリーブランド「HASUNA」を設立し、11年には日経ウーマン・オブ・ザ・イヤーを受賞した。14年にForbes誌「未来を創る日本の女性10人」に選ばれるなど、世界的にも注目を集めている。現在は武蔵野大学アントレプレナーシップ学部教授も務め、女性の働き方や起業、サステナビリティ、ブランディング、ウェルビーイング、SDGsなどをテーマに国内外で講演活動も行っている。

JICAはSDGsの実施を促進する組織として、世界各国でSDGsビジネスを支援している。

パンデミック期間中に、アフリカでSDGsビジネスのスタートアップのピッチコンテストを開催し、最後まで残ったスタートアップ企業のうち、女性のCEOも数人いたことからヒントを得て、今回のシンポジウム開催へと繋がっていったと企画立案者であるJICAブラジル事務所 川村怜子次長は語る。

川村次長にシンポジウムを開催したいと思い至った経由を訊ねたところ、「私が2022年3月にサンパウロに着任して、いくつかの日系団体のイベント・式典等に参加する中で、幹部の中に女

性の姿がとても少ないことに気付きました。日系団体の中でお会いする女性の多くは婦人部でお料理を作り配膳したり、日本語の先生として活躍されていて、他の分野のロールモデルが少ないと思い、どうしたら若手の日系人女性たちがリーダーとしてブラジル経済の中で活躍できるようになるか、ずっとその糸口を探っていました。2022年9月以降、若手の日系団体の中でも女性がリーダーとして活躍しているREN BrasilやNEBにコンタクトを取り、どのようにJICAが支援できるか相談を重ねてきました。その中で、起業家支援、SDGsビジネス紹介の2点ができるシンポジウムの開催に思い至りました。」と答えてくれた。

続けて「ブラジルで成功している企業家の方に聞くと、日系人は控えめなビジネスの現場ではアピール力が不足しているとのこと。また、日本ではかなりSDGsに配慮したビジネスが浸透していますが、ブラジルではまだまだ。そのため、日本人女性でありながら、SDGsビジネスを成功させていて、且つ日本国内でSNS発信や大学教授として活躍し、国際会議にも起業家の一人として参加している白木さんの事例を見れば、日系人女性にとって良いモデルケースに感じられ、モチベーションアップにつながるであろうと考えました。」と語った。

SDGsビジネスの第一線で活躍し、起業家支援にも携わる白木夏子さんは、まさに今回のシンポジウムのテーマにピッタリの人物だ。白木さんの講演は、少しコミカルな味付けもあり、リラックスして聴くことができた。母親、起業家としての視点や悩みから解放される考え方など、凄い！と思える内容から共感を覚える内容まで大変有意義で、参加者達は講演内容にとっても満足したと話していた。

また各国から参加した日系女性起業家やリーダーたちはネットワーキングの中で、白木さんをはじめサンパウロ、ブラジリア、クリチバ等の大都市出身のリーダーの先進的な取り組みに感化される様子もうかがえた。

ジェンダー平等やSDGsビジネスへの理解が深まり、未来を担う女性達に大きな勇気を与え、盛会裏に終わったシンポジウム。最後に企画立案者であるJICAブラジル事務所の川村怜子次長に今後の展望を尋ねると「できれば2023年度中に日系人女性を対象としたSDGsビジネスプランのコンテストを開催したいです。」と語ってくれた。

今後の発展が楽しみである。



コジロー出版と月刊ピンドラーマ

『ピンドラーマ』創刊～

サンパウロで暮らす日本人向けのフリーペーパー「月刊ピンドラーマ」は今年で創刊17年目（創刊は2006年6月）、通算200号を超えた。創刊当初は現地の老舗の出版社（ショーエイ出版）から発行していたが、2007年9月にコジロー出版を創立し独立した。社名の「コジロー」は弊社代表の川原崎が当時飼っていたネコの名前である（コジローは昨年8月に18歳で他界した）。創刊から1年半くらいの間は知名度も低く広告営業の面で苦戦したが、その後は広告の売り上げも徐々に伸び、誌面も多彩な執筆者に恵まれますます充実していった。これまで記事を書いていたのはプロのライターだけでなく、観光ガイド、大学教師、歌手、弁護士、医者、行商人、主婦、漫画学校教師、鍼灸師、ラーメン職人等様々で、記事に困ったことはほとんどないと言ってよいほどである。また、最新号を見ると、創刊当初から現在まで続いている連載が多い（「クラッキ列伝 / 下園昌記」「移民の肖像 / 松本浩治」「ブラジル版百人一首 / 岸和田仁」「開業医のひとりごと / 秋山一誠」(以上敬称略)は全て14年以上連載を続けている)。「ピンドラーマ」を通して17年、ブラジル文化の脈を掘り続けてきたが、掘れば掘るほど新たな宝石が見つかり喜びの声が絶えることはない。

ブラジルでの仕事

創刊時から現在まで悩まされているのが印刷の質だ。ブラジルの印刷技術は残念ながら日本と比べると劣っており、色合いが毎月異なり、同じ号のなかでもかなりムラがあるのが通常で、今でも刷り上がりを見る時は少し胃が痛くなる（実際、あまりにひどい時には刷り直したことも幾度かある）。

また、弊社事務所近辺（東洋人街リベルダーデの一角）は少し前まで大雨が降ると停電することが多く、締め切り近くに雨が降ると停電しないよう祈ったものである。この停電の件も含めて、日本なら数分で済む作業が当地では数時間かかることもしばしばあるが、イライラするのとは反対に、「これがブラジルの時間の流れ」と、あせらずのんびり仕事に向かっている。

楽々サンパウロ

「ピンドラーマ」が地元の日本人に浸透し、広告営業も安定してきたので、次に、サンパウロで暮らす駐在員（及びその家族）向けに、観光・医療・食・娯楽・買い物・教育・生活のインフラ等、



布施直佐
(「ピンドラーマ」誌編集長)

日常生活のほぼ全てを網羅した日本語のガイドブック「楽々サンパウロ(以下楽々)」を2011年12月に発行した。全200ページ超、オールカラーの大部の本ゆえ、編集に予想以上の時間がかかり発行が大分遅れてしまったが、こちらの予想を超える好評を博し、以降ほぼ隔年で新版を発行することとなった。この「楽々」があればサンパウロで初めて暮らす人も楽に新生活をスタートできるものと自負している。

この「楽々」も「ピンドラーマ」も、表紙は現地で活躍しているプロの写真家の方々に通常お願いしているが、2回だけ「楽々」の表紙をグラフィッチアーティストの中川敦夫さんに描いていただいた。2019-2020年版はサッシペレレや首なしラバ等、ブラジルの妖怪たちが独特のタッチで描かれ、ガイドブックとしては異例のインパクトのある表紙となった。



記憶に残る自費出版

また、散発的ではあるが、日系団体の記念誌や個人の自分史の仕事も入るようになり経営の助けとなった。中でも印象深いのが、パラグアイ在住のT・Iさんが若い頃にアマゾンの鉱山で働いていた時の日記の自費出版である。現地のガリンペイロ(金鉱採掘人)たちの無法ぶりや娼婦との生々しい交渉が飾り気のない言葉で綴られ、T・Iさん本人の異彩を放つ容貌と共に記憶に強く刻まれている(T・Iさんはその後、大女優・木暮美千代の付き人をしていた時の回想録を書いたが、こちらも木暮美千代の素顔を伝える貴重な記録である)。

パンデミア以降

ブラジルでパンデミアが本格的に始まった2020年3月以降、「ピンドラーマ」の広告主の多くが打撃を受け広告の出稿量も激減し、弊社も創立以来初めてとなる厳しい時期を過ごすこととなった。この期間は「ピンドラーマ」のバックナンバーや広橋勝造氏のコロナ・アクション小説(めっぼう面白い!)のKindle版を販売したり、note.comに記事を掲載したりと新しい試みを模索した時期であった。パンデミアがほぼ収まり、広告主が徐々に戻りつつある現在、新たな事業として今年の4月からブラジルの大手不動産会社と提携し、駐在員向けにサンパウロの賃貸アパートの仲介を始めることになった。不動産の仲介に関連して新たな展開が望め、今後が非常に楽しみである。弊社は小出版社ゆえ小回りが利くので、面白そうな企画は出版に限らずどんどんチャレンジでしていくつもりである。

知的財産権のライセンス契約に関する最近の動き



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

1. 知的財産権のライセンス契約に関するこれまでの議論

特許権、商標権、著作権、ノウハウなどの知的財産権のライセンス契約に関しては、長年多くの議論があった。その論争の中心はブラジル産業財産庁 (Instituto Nacional da Propriedade Industrial. 以下「INPI」という) の私的契約への介入の可否であり、裁判で争われることも少なくなかった。INPI がライセンス契約の登録を要求するようになった歴史的な背景は、ブラジル企業が外国企業から搾取されないよう、契約内容を事前に審査することにあった。そのため、INPI は、ライセンス契約の登録審査にあたり、ブラジル企業に不利になるような条項の修正や削除を求めている。特に、INPI は、特許化されていない知的財産権 (ノウハウ) のライセンス契約を認めておらず、これをノウハウの「移転契約」という形で取り扱っていた。そのため、契約終了後にライセンスを受けたブラジル企業がノウハウを利用できなくなるような内容の契約条件は「移転」ではないとして受け入れなかった。

このような INPI のスタンスは 2017 年に制定された INPI 規則 (Instrução Normativa INPI/PR nº 70/2017) により変更され、同規則制定後は、INPI は契約内容について介入しなくなった。そして、INPI は、2022 年 12 月に理事会を開催し、その中で、改めて契約内容に介入しないことを明らかにした。そのほか、2022 年 12 月 30 日に施行された外国為替法 (2021 年法 14286 号)、同月 29 日に公布・施行された 2022 年暫定措置令 1152 号及び同月 31 日に公布・施行されたブラジル中央銀行の各種規則 (2022 年規則 277 ~ 281 号) により知的財産権のライセンス契約に関して多くの変更が行われた。

2. 外国為替法による変更

(1) ブラジル中央銀行への登録が不要に

従前は、ブラジル企業が海外企業に知的財産権のライセンス契約に基づくライセンスフィー等を支払う場合にはブラジル中央銀行に登録する必要があり、その前提として、INPI への登録が必要であった。同法施行により、海外送金のためのブラジル中央銀行への登録も INPI への登録も不要になった。

(2) 親子会社間でのライセンスフィーの上限の撤廃

これまでは、外国の親会社とブラジルの子会社間でのライセンス契約に基づくロイヤリティの上限はロイヤリティの損金算入可能額とされていたが、かかる上限が撤廃された。そのため、今後は当事者間で自由にロイヤリティを設定できる。ただし、移転価格税制に留意する必要がある。

3. 暫定措置令 1152 号による変更

暫定措置令というのは、重大かつ緊急の場合に、大統領が制定する通常法と同一の効力を有する暫定的な法律で、公布により直

ちに効力を生じるが、120 日以内に国会で承認されなければ効力を失う。暫定措置令 1152 号は、2023 年 6 月 1 日までに国会の承認を得られなければ効力を失う (国会が閉会されていた期間を除いて 120 日が計算される)。

同暫定措置令によりロイヤリティ支払に関する損金算入可能額の上限が撤廃された。従前は製造又は販売された製品の総売上高の 5% が上限であったが、同上限を定めていた 1962 年法 4131 号の条文が削除された。

なお、ロイヤリティの支払いを損金算入するためには INPI への登録が要求されているが、この点についての変更はないため、損金算入するためには INPI への登録が引き続き必要となる。

4. ブラジル中央銀行規則による変更

ロイヤリティの支払は、為替市場で許可を受けた金融機関を通じて行われなければならないことなどが新たに規定された。

5. INPI 理事会決定による変更

2022 年 12 月に開催された INPI 理事会において、ライセンス契約の契約条件 (ロイヤリティの額など) を INPI が審査対象としないことが改めて確認されたほか、契約の登録の簡易化に関して以下の事項が決定された。

(1) 電子署名

ICP-Brasil という規格で認証されていない電子署名もライセンス契約の登録において認められることとなった。また、契約書の全ページに署名者のイニシャルを入れることが不要となり、その代わり、代表者が、提供された情報や文書の真実性を証明することが必要となった。

(2) 証人による署名

INPI は、2 人の証人による契約書への署名を要求していたが、契約書がブラジルで署名されている場合は、2 人の証人による署名を不要とした。なお、ブラジルでは、私的契約一般について、証人 2 人が署名することによって、契約当事者が錯誤や脅迫なしに契約を締結したことが推定され、契約書に基づき強制執行する際、契約書が強制執行の債務名義になり得る。かかる債務名義を得る目的においては、ライセンス契約も引き続き 2 人の証人による署名が必要となる。

(3) 登録時の定款等の提出

INPI への登録申請時に会社定款等の書類の提出が不要になった。

(4) ノウハウのライセンス

INPI は、従前は特許化されていない知的財産権 (ノウハウ) についてのライセンス契約を実質的に認めておらず、契約の登録は認めるものの、登録証に、「ノウハウのライセンス契約は無効である」との注記を記載していた。INPI はかかるスタンスを変更し、ノウハウのライセンス契約を認めた。

ブラジル国税庁 (Receita Federal) 2021-2022 年 年次調査報告書について



天野義仁
(KPMG
ブラジルジャパ
ンデスク責任者)



三上智大
(KPMG ブラジル
ジャパデスク
マネージャー)

ブラジルでは多くの企業が税務調査に対して不安を持っているが、税務当局の調査重点項目等を把握しておくことは、将来税務調査において指摘されるリスクを軽減する上で役立つといえる。税務当局は毎年、年次調査報告書を公表しており、直近は 2022 年 11 月 1 日に公表されているため、今回はその内容について簡単に説明したい。

2021 年税務調査結果の概要

2021 年のブラジル税務当局 (RFB) の税務調査による徴税額は、2020 年と比較して約 13% 増加した。これは 2020 年と比較して税務調査手続件数が増加 (2020 年 323 千件 → 2021 年 429 千件) していることが挙げられる。2021 年の税務調査で徴収された連邦税に係る税額の内訳としては、IRPJ(46%)、CSLL(13%)、COFINS(11%)、雇用主負担の INSS 負担金 (9%)、IPI(6%) の 5 つの税金で計 85% を占めている。

RFB では、納税者の規模に応じた検査体制の整備により、税務調査官は、移転価格、濫用的なタックスプランニング、外国貿易取引における課税ベースの侵食、企業再編取引など、貢献度 (支払い能力) の高い納税者に特徴的なテーマに特化することが可能となっている。

RFB による税法に遵守した正しい納税への誘導及び効率的な行政の原則に従い、貢献度の高い納税者は、活動に関する内外の情報に基づき、常に監視の対象となっている。その際に、脱税対策に重点を置くだけでなく、経済的な観点も考慮して、連邦税の徴収水準に強い影響を与える可能性がある貢献度の高い納税者の活動を監視している。現に、貢献度の高い納税者は納税者総数の 0.01% 未満に過ぎないが、その徴税額は 2021 年の連邦税収の 60% を占めている。

2022 年税務調査計画及び指針

2022 年税務調査計画は、例年通り、RFB が税務調査対象企業を適切に選択し、税務調査時に、より関連性の高いトピックに焦点を当てることができるように定められている。

前回 2021 年 11 月号で記載した 2021 年税務調査計画に記載されている「ブラジル国税庁は、ブラジルの税法が適用される可能性のある海外の銀行口座から財務情報を収集・受信することが可能の旨」、「規範的命令 1,888/2019 に従ってブラジル国税庁に報告しなければならない暗号通貨の取引を含む、国際取引を伴う脱税スキームを特定するための新し

いツールの開発」、「税務上の資産の償却を伴う企業再編を含む、タックスプランニング」については、2022 年税務調査計画でも引き続き取り上げられている。その他の取り上げられている項目 (抜粋) は以下の通り。

◆税務の協力的コンプライアンスプログラム (CONFIA)

現在、税金の継続的な納付において税務当局と納税者の間で係争に発展することが恒常的に発生しているが、これらの課題を解決するため、納税者と税務当局の間で協力関係を構築するモデルへの転換が急務となってきた。このような背景から RFB は、訴訟の削減、ビジネス環境の改善及び徴税の予測可能性を高めるため、透明性、協力及び法的安定性に基づき、税務当局と納税者の関係を構築する目的の CONFIA プロジェクトを開始した。

2021 年、CONFIA の枠組みの中で RFB と納税者が協力関係を構築するための運営委員会と対話フォーラムが設立され、今後の計画として、CONFIA モデルの草案、優良税務慣行規範 (CBPT) 及び税務管理フレームワーク (MCF) のガイドラインの作成が予定されている。

◆Rota Brasil (税務トレーサビリティプログラム)

税務調査官による内外の情報に基づいた分析により、一部のセクター (たばこ、飲料、印刷用紙、バイオ燃料) において複数の業者が脱税を目的とした行為を行っていることが特定されており、その結果、税務上の義務を遵守する同業者が不公正な競争を強いられている。

当該問題を是正するため、全国的な商品の生産に関する監視及びトレーサビリティを確保することを目的とした Rota Brasil プログラムが 2022 年 4 月 15 日の省令 RFB165 号によって制定された。まず最初にたばこ及び飲料セクターに焦点を当てているが、将来的に他の製品に拡大される可能性がある。

年次調査計画はブラジル国税庁がどのような枠組みにおいて行動するかを決める青写真である。当寄稿では一部しか記載出来ないが、ここで紹介したようなブラジル国税庁の動向等を把握することにより、ブラジルの税法を遵守し、将来の税務リスクを低減させる上で役立つことを願っている。

参照…<https://www.gov.br/receitafederal/pt-br/centrais-de-conteudo/publicacoes/relatorios/fiscalizacao/relatorio-anual-fiscalizacao-2021-2022.pdf/view>

バンダ・マンダカリーニョ 結成12周年



八木美楠子
(バンダ・マンダカリーニョ主宰)

ブラジル音楽のビッグバンド、Banda Mandacarinho (バンダ・マンダカリーニョ)。気がつけば結成して12年経った。生まれだての赤ちゃんが中学生になる年月って考えると、とても長くやっているような気がする。Paulo Cesar Gomes (通称 Paulinho) というブラジル人ピアニストと一緒に始めたこのバンド。Paulinho が2012年に亡くなってからも、その教えを広めたい気持ちもあり、意志を継いで活動を続けている。

今まで、ライブハウスやジャズフェスティバルで演奏してきたが、去年はウルグアイの人間国宝的なミュージシャン Hugo Fattoruso と、世界で活躍するカナリア諸島出身のパーカッションニスト、ヤヒロトモヒロのユニット、Dos Orientales と初共演することができた。

Hugo のオリジナル曲も演奏したのだが、編曲しながらその色彩感到感動し、本番ですごいグルーブの嵐に突入。指揮をしながら嬉しくて叫びそうになった。



さて。Banda Mandacarinho は、主にMPB=Música Popular Brasileira というジャンルの音楽を演奏している。中でも Ivan Lins の楽曲のレパートリーはとても多い。世界を見回しても、こんなに Ivan の楽曲を演奏しているビッグバンドは他にないだろう。2020年11月号のブラジル特報にも書かせて頂いたように、2枚目のアルバムでは Ivan に1曲歌ってもらうことができた。

思い返せば30年以上前、エネルギーと愛に満ちた Ivan の音楽は言葉や国境を超えて、地球の反対側に住んでいた私の人生を救ってくれた。なので、Ivan と Ivan の楽曲には感謝と特別な思いがある。今回は敬愛する音楽家、Ivan Lins のことを沢山書いておこうと思う。

Ivan Lins は1945年、リオデジャネイロで生まれた作曲家・シンガー・ピアニスト。

幼少期の数年父親の転勤でアメリカに住んでいたことで、ジャズやディズニーなどの音楽も耳にいつつ育ったようだ。リオに戻ってから学校のプラスバンドでトランペットを担当した

りもしているが、なんとピアノは独学。大学ではセメントのことを学んでいたというから驚きだ。1970年に“Madalena”を国民的歌手であった Elis Regina が歌ったことで Ivan の名前と音楽はブラジル中に知れ渡るようになる。

ある程度の世代以上だと Quincy Jones の「愛のコリーダ」という曲をご存知の方も多いと思うが、このアルバムに Ivan の書いた“Velas”が収録されている。テーマを吹くのは2016年に94歳で亡くなったハーモニカの Toots Thielemans。父親のレコードを盗んで聴いていた私の子供時代。ノリノリの「愛のコリーダ」のB面、確か最後から2番目くらいに収録されていたのが“Velas”。キーボードに口笛が乗ったイントロから心を捕まれ、感情を震わせたのを覚えている。そう。Quincy Jones が Ivan Lins を発見し、アメリカでも知られることになったのだ。

80年代半ばにはアメリカ西海岸を代表するミュージシャン Lee Ritenour や Dave Grusin のアルバム“Harlequin”でも数曲、Ivan の楽曲が演奏されている(もちろん本人も歌っている)のだが、日本でも同じ頃、とんねるずが出ていた出光石油のコマーシャルで Ivan の曲が使われていたのだ！それも給油してポイントを貯めると、出光石油が作った Ivan のミニCD が貰えたのだ！(なんてイイ時代！)

Ivan の楽曲には英詞のついた“Love Dance”などの曲もあるが、代表曲でもある“Começar de novo”にも“The Island”というタイトルで英詞がつけられ、Sarah Vaughan や Manhattan Transfer など大御所のアメリカ人シンガーにもその楽曲を歌われるようになっていった。

ジャズ歌手のみならず“She Walks this Earth” (ポルトガル語題“Soberana Rosa”) という Ivan の曲で、Sting がグラミー賞を受賞している。また、25年以上前だが Terence Blanchard が Ivan の曲だけを演奏したアルバムを出すなど、インストゥルメンタルの楽曲としてもその評価は高い。

デビューして50年以上。喜寿となった今でもブラジル国内はもちろん、ヨーロッパでも精力的に演奏活動をしている。

この号が出る頃には Banda Mandacarinho のライブが終わったばかり。Ivan の楽曲を含め、心がきゅん、ってするブラジル音楽を、これから沢山届けていきたい。



VIVENDO

ブラジルに暮らして

ポルトセグーロ発サンパウロ行きバスのなかで

高橋寧緒
(ブラジル日本交流協会研修生)

ブラジル生活も11ヶ月が経とうとしている。今までの10ヶ月は、研修中心であった。世界規模で活躍する物流会社、郵船ロジスティクスの倉庫でブラジル人達に混じって研修させていただいた日々がとても懐かしい。受け入れて頂いた社長のチクさん、共に働いた同僚の方々への感謝の気持ちでいっぱいである。始めはポルトガル語がわからず戸惑いもあったが、従業員みんなの支えがあって、徐々に慣れていった。夜は、学校でポルトガル語を1から学んだ。忙しく充実した日々が、自分の成長の糧になったと確信している。

最後の1ヶ月は休暇を頂き、1週間をリオ、残り3週間はノルデスチを周遊することに決めた。現在その旅の最後の目的地ポルトセグーロからサンパウロ行きのバスでこの文章を執筆している。

なぜこのルートを選んだのか。最初の目的地はリオ。ここは、私が初めてブラジルを知った思い出の深い場所である。7年前、当時所属していた防衛大学校の短期留学でこの地を訪れた。1週間という短さながら、士官候補生同士の交流という目的は果たされ、ブラジルの多様性、ブラジルと日本の文化の違いに感銘を受けた。当時は、その感動が数年の船勤務を終えた自分

をブラジルへ再度導くことになるとは思もしなかった。今回のリオ滞在で、当時交流した方達と再会し、感謝を伝え、近況報告をし合った。7年越しの夢が叶った瞬間であった。

次の目的地は、ノルデスチ。この舞台を選んだ理由は2つある。1つは、ブラジルが発見された場所、最初の首都や黒人奴隷の歴史からわかるように、国の原点がここにあると考えたからである。2つ目は、研修先の倉庫の人達から、行きつけの定食屋の人まで、ほとんどノルデスチ出身であり、興味を持つようになったからである。

旅はマラニャン州のサルイス、レンソイスから始まり、セアラ州で北東部屈指の名所を周り、ペルナンブーコ州レシーフェ、オリンダでカーニバルの開会式に参加、アラゴアス州マセイオで海の綺麗さに感動し、カーニバル真っ只中のサルヴァドールで激動の1週間を過ごした。

望んでいたとおり、この3週間の旅は、刺激的な人々、素晴らしい自然、美味しいご飯との出会いの連続であり、ブラジルの原点からたくさんのエネルギーを吸収することができた。特に各地での人々との出会いは、今後の自分の人生に大きな影響を与えるだろう。

ジャーナリストの旅路

和食恋しいリオの秋

大月美佳
(読売新聞リオデジャネイロ支局長)

和食が恋しくなる秋の夕暮れ。リオデジャネイロに赴任して7か月だが、私も生粋の日本人、たまには日本の食べ物を思い出す。手っ取り早いのは、近所のちょっとした高級スーパーで売っている大西洋の生マグロを使っの手巻き寿司だ。おそらくメジマグロ(関西ではヨコワ)と思われるが、400グラムで約40レアル(約1040円)と、日本で購入する同じ品質のマグロよりずっと安い。ただ海苔やわさび、ジャポニカ米は割高だ。

朝食にほしいのはもちろん納豆。近所のアジア食材店では納豆の本場・水戸から冷凍保存で直送されたものが、4パック入りで42レアル(約1100円)。高級スーパーには豆腐も売っているが、3種類のうち一番柔らかいと教わったものを選んでも、沖縄の島豆腐よりもはるかに硬い。

ほかにも和食の代表格、親子丼。東京・人形町にあった有名店では鶏もも肉とむね肉を半々で使ったらしいが、当地のもも肉と鶏皮には特有の臭いがあり、むね肉のささみだけで勝負。具をまとめる卵も、日本が誇るTAMAGOとは随分異なっていてふんわりとした仕上がりが期待できない。ある人は「三

つ葉がないものは親子丼と言わない」と言ったそうだが、ずいぶん探したものの代わる香葉はない。

現地調達取り組みもある。先日の日系人の集まりで、幼少期に鹿児島から来泊したという女性からいただいたのが、大葉とニラ。自宅の庭でこれら日本食材を栽培しているとのこと、懐かしい香りと食感に感激した。ちなみに、ニラを包む餃子の皮をパステルの生地で代用したところ、とんでもない特大の餃子になってしまった。

和食愛は世界を席巻する。SUSHI や TEMAKI 人気はブラジルでも一過性のブームではなく、コパカバーナなどリゾート地では高級店があり、近所のスーパーでも寿司をつまめるバーがあって持ち帰りもできる。チーズが入っていたり、揚げられたり、はたまたパルメザンチーズとトリュフがトッピングされていたりと、米国発の「カリフォルニアロール」とも異なる進化形が定着している。日本文化を吸収し、自由な発想で発展させる柔軟性に驚かされる。

リオは暑い夏が終わり、スーパーや市場には日本人移民が広めたという柿(CAQUI)が並んでいる。望郷が募る瞬間だ。

天才的作曲家 ヴィラ＝ロボスの画期的評伝を読む

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

カルロス・ジョビンとヴィラ＝ロボス

あるインタビュー記事で「ストラヴィンスキー、ドビッシー、ショパン、ヴィラ＝ロボスが僕にとっての師匠だった」と語っていたのがボサノヴァの創始者カルロス・ジョビンであったが、彼にとってヴィラ＝ロボスは師匠以上の特別な存在であった。別のインタビュー記事では、「ヴィラ＝ロボス、僕はヴィラ＝ロボスについて語りたい。彼は天才だったと思う。家に三度訪ねたことがあるんだ。ブラジル工業連盟ビルの前、あのすごく有名なパウル・ヴェルメーリョ」があるビルに住んでいてね。僕はヴィラ＝ロボスの作品をよく知っていたから、彼の誕生日にレオ・ベラッキが連れていってくれたんだ。（中略）彼の小さなアパートでは、小編成のオーケストラが彼の作品を演奏していて、ソプラノ歌手が声を振り絞って歌っていた。部屋の隅では人々

演中、体調がすぐれなかったで、病院でチェックしたら、肺ガンと診断され、即入院となったのだ。左肺がやられているが、他の臓器には転移はしてなかった由で、集中化学療法によって病状は一旦収まったので、同年9月以降、様々な国際イベントで出演したり、翌年のカーニバルでは400名近いパーカッション隊列をリードしたりしていた。

そんなナナが入院中、病室で繰り返し聴いていたのが、ヴィラ＝ロボスの三枚組CDだったことはあまり知られていない。ピリンバウをカポエイラの「呪縛」から解放したナナにとってもヴィラ＝ロボスは特別な存在であったことを示すエピソードだった。

本格的評伝『ヴィラ＝ロボス』（木許裕介著、春秋社）の魅力と豊饒な内容

と、いきなりジョビンとナナのエピソードを記してしまったが、これは、ヴィラ＝ロボスの日本では初めての本格的評伝（全500頁！）をなんとか読了した時、彼らのことが自然と脳裏に浮かんできたからだ。

ここでこの大著の素晴らしさについて、いくつか要約的にメモを重ねてみよう。

まず、日本語で読めるヴィラ＝ロボス評伝といえ、長い間、『白いインディオの想い出—ヴィラ＝ロボスの生涯と作品』（アンナ・ステラ・シック著、鈴木裕子訳、トランスビュー、2004年）しかなかった。この作品はそれなりに読ませる内容のある評伝だが、この作曲家にまつわる数多くの「創られた伝説」をあまり検証もせず記載しており、テキストクリティックが不完全な著書であった。

今回刊行されたヴィラ＝ロボス評伝が画期的といえるのは、関連文献・資料の調査・読み込み、最近のヴィラ＝ロボス研究成果の吸収・チェックはもちろんのこと、ブラジル各地での現地調査や多くの研究者との交流を繰り返し深耕したうえで叙述に工夫を凝らしていることだ。端的に言えば、完璧主義者らしい作品に仕上がっている。

第Ⅰ部 生涯と作品、では時系列で彼の生涯を様々なエピソードも交えながら語っており、第Ⅱ部 作品総論、では、ギター作品、ピアノ作品、室内楽曲、ショーロス、ブラジル風バッハ、声楽作品、交響曲、というジャンル毎に詳しくプロの解説を付している。

著者は気鋭の指揮者にして日本ヴィラ＝ロボス協会会長であるから当然の大著なのかもしれないが、やはり、著者が、「知の巨人」立花隆氏の助手としても活躍し、その知的生産ノウハウを吸収した才人であることは指摘しておきたい。師匠の教え「自分の足で見よ」に忠実に従った成果が、本書というわけだ。こんな労作を日本語で読める幸せをかみしめた一読者としての感想である。



▲500クルザドス紙幣（1986年発行）



▲ヴィラ＝ロボス

がお喋りしていて、しかもラジオが大きな音で鳴っていた。そして、偉大なマエストロはピアノに座って、譜面を書いていた。葉巻の煙をまとっているヴィラ＝ロボスに近づいて、音が気になりませんかといってみました。すると、「お若い人よ」と彼は答えた。「外側の耳は、内側の耳とはなんの関係もないものなのだよ」僕はこの言葉を長い間、忘れられなかったな。」（『アントニオ・カルロス・ジョビン』エレナ・ジョビン著、国安真奈訳、青土社、より引用）

あちこちで繰り返し「ブラジル最大の作曲家に対し、尊敬の念が欠けている」と怒っていたジョビン。ブラジルが生んだ二人の偉大な音楽家は、あの世でどんな会話を交わしているのだろうか、その一部でも聞きたいものだ、と思うのは筆者だけではあるまい。

ナナ・ヴァスコンセロスとヴィラ＝ロボス

グラミー賞を8回も受賞したことで欧米のメディアから「世界で一番優れたパーカッショニスト」と評されたのが、ペルナンブーコ出身のピリンバウ奏者ナナ・ヴァスコンセロス（1944-2016）であった。そんな有名ミュージシャンがレシーフェ旧市街を一人で歩いていたので、たまたま近くにいた筆者が声をかけたら、気さくにに応じてくれ、数分の立ち話程度であったが、会話を交わすことが出来た。軽く握手をしたのだが、なんとも柔らかな手だった、との皮膚感覚がいまだに記憶に残っている。確か、2006年10月のことだった。



▲ナナ・ヴァスコンセロス

そんな彼にガンが見つかったのは、2015年8月のこと。リオ公

●前大統領への高額贈答品をめぐって

オ・エスタード・デ・サンパウロ紙の報道によると、ボルソナーロ前大統領は、2021年にサウジアラビアを訪問した際、同国政府からミシェーレ夫人への贈呈品として300万ユーロ（1650万レアル）相当の宝飾品を受け取ったが、非合法的な手段により、通関させようとしていたことが判明。報道によると、贈呈品は、サンパウロ・グアルーリョス国際空港の税関において、アルブケケ鉱山エネルギー相（当時）の補佐官が手荷物と共に未申告のまま、関税を払うことなく、通関しようとした際、税関職員に呼び止められ、検査の結果、贈呈品は押収された。その後、アルブケケは、大臣の特権を使って取り戻そうとしたが、税関は、規定通りに関税（50%）の支払いを要求し、大臣の要求には屈しなかった。その後、連邦政府は、経済省、鉱山エネルギー省、外務省等を動員して働きかけを行ったが、奏功しなかった。政府による試みは8回に亘って繰り返された。ボルソナーロの任期が終了する2日前（12月29日）に「ジャイロ」と名乗る政府職員が空軍機でグアルーリョス空港に赴き、「新政権が前政権の物を所有することはできない。（前政権の物は）全て回収し、持ち帰る」と迫ったが、税関は応じなかった。その前日にはボルソナーロ本人が歳入庁に対して申し入れを行っている。アルブケケは取材に対し、

回収を試みたことは認めたが、贈呈品の中身については承知していなかったと弁明した。ミシェーレ夫人は報道内容を否定し、メディアを批判した。（3月4日付コレイオ・ブラジリエンセ）

●国際婦人デー

ルーラ大統領は、3月8日の「国際婦人デー」に合わせて、11名の閣僚と共に、女性の地位向上に関する施策を発表した。主な施策は以下の通り：①DV対策（シェルターの設置等）の再開、②女性を犯罪から守るため、警察車両270台を各州の警察に提供、③ILOの暴力・ハラスメント条約（第190号）の批准、④「生理衛生促進プログラム」の実施、⑤保育所の建設再開。また、ルーラは、「男女同一賃金法案」に署名し、議会に提出した。伯では男女同一賃金の原則はあるものの、実際には男女間の賃金格差は解消しておらず、女性は男性より平均3割安い賃金に甘んじている。政府案は、監視の強化、行政罰の適用等により、男女同一賃金の実現を目指すとの内容になっている。尚、連邦議会でも国際婦人デーに因んだ式典が開かれたが、ウェベル連邦最高裁判所（STF）長官（女性）は、伯の議会における女性議員の割合が諸外国に比べて著しく低い（下院17.3%、上院18%）ことを批判した。（3月9日付コレイオ・ブラジリエンセ）

キャンパス・コラム

ブラジルから学ぶ首都移転

向井シヨーン虎太郎
（東京外国語大学3年）

1960年にブラジルは近現代国家でも有数の首都移転を成し遂げた。首都がリオデジャネイロからブラジリアへと大移動した訳だが、この移転の主要な理由として挙げられるのが自国での新首都建設（旧宗主国からの脱却）と地域間経済格差の是正である。前者はポルトガル支配の名残が残るリオデジャネイロから新しく自国で創る首都へと移ることを指し、後者はリオデジャネイロやサンパウロ、サルヴァドールのような主要都市・経済圏が大西洋沿岸に集中している状況を改善する足掛かりとして首都を内陸部に創るという意味である。建設期間はわずか3年10か月という短い間だったが、首都移転構想そのものはブラジリア誕生から210年も前から非常に長い歴史をもつ。

ところで現在、首都移転で大きな注目を集める国がある。インドネシアだ。同国は2019年に首都移転を公式に発表し、昨年1月に国会で法整備を行い、現在進行形で建設が進んでいる。ジャカルタから東カリマンタンのヌサンタラへの首都移転するこの計画は同国政府発表によると15～20年で完了するやや長丁場なものになるが、移転の理由も様々ある中でブラジルのそれと似通うものがある。1つに、ジャワ中心主

義からの脱却である。これはGDPの6割がジャワ島に集中し、人口集中地域もジャカルタを筆頭にジャワ島にあることから、政府は地域間格差の是正を目指す。また、ジャカルタの限界も常々言われており、渋滞や洪水等の都市問題は首都移転の重要な理由となっている。そしてジャカルタは旧宗主国オランダの名残でもあり、自国での首都建設は初代スカルノ大統領の夢でもあった。実はインドネシアの首都移転計画も歴史を持つもので前述のスカルノのみならず、2代大統領スハルトも計画していたがいずれも頓挫して現職のジョコ・ウィドド大統領が移転を決定した。このようにブラジルとインドネシアの首都移転は計画上の重要な面で類似性をもつ。

ブラノ・ピロットと呼ばれる飛行機型の見事な近代的計画都市で、今やブラジル第3の都市であるブラジリアは間違いなくヌサンタラ建設の大きな参考になる。一方でブラジリアでは主な交通手段が自動車であること、衛星都市における貧困、首都移転後の経済危機が問題となっている（なった）点も、新首都がクリーンな都市を目指すうえで留意すべきである。今後インドネシア政府にはブラジルの事例を十分に活かした首都移転を進めてほしいものだ。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『ヴィラ＝ロボス』(木許裕介著)

天才的作曲家ヴィラ＝ロボスの日本では初めての本格的評伝がついに刊行された。著者は気鋭の指揮者にして日本ヴィラ＝ロボス協会会長であるが、「知の巨人」立花隆氏の助手としても活躍した才人。師匠の教え「自分の足で見よ」に従い、ブラジル各地での現地調査、関連文献資料の探索・読み込みと並行して先行研究者たちとの濃厚な交流を繰り返した成果が本書(評伝&作品論)だ。既にヴィラ＝ロボス教典と呼べるほどの叙述内容に脱帽!

(春秋社 2023年3月 500頁 3,800円+税)

『中南米グルメ紀行』

(さかくちとおる著)

フリー編集者による中南米各地(メキシコ、グアテマラ、ニカラグア、パナマ、ペルー、ブラジル)の食べ歩き紀行集だが、多様な食文化を写真と文章を通

じて各々の背景も含め味わうことができる。ブラジルのアラブ系料理もフェイジョア・ダ・歴史話もミナス料理もバイーア料理、アマゾン料理も、さらにはフェスティバル・ド・ジャパンにおける本格的ラーメンも出てくる。コロナ禍以前の”最新情報”だが、読者は素直に読み進める内容になっている。

(東京堂出版 2022年12月 198頁 1,800円+税)

『綿の帝国』(スウェン・ベッカー著、鬼澤忍・佐藤絵里訳)

綿織物も綿花栽培も長い間インドが独占していたが、17世紀以降欧米諸国(特に英国)がその貿易に介入し、南北米大陸において黒人奴隷を使役してプランテーション栽培を広め、18世紀後半以降の産業革命が確立した機械紡績技術力によってグローバル資本主義を展開した。この歴史的ファクトを膨大な資料調査を通じて詳述した快著だが、米国ばかりかブラジル(特にノルデスチ)の綿花栽培並びに綿紡績業の重要性もデータに基づき叙述している。

(紀伊国屋書店 2022年12月 848頁 4,500円+税)

『ぼくは、カウアン』(たかまつようこ著、ウミノカズコ絵)

著者は JICA 日系社会青年ボランティア

ア制度を通じてサンパウロのブラジリア学園で2年間教育現場を体験した小学校教諭。現在愛知県教諭として活躍しているが、教え子には在日ブラジル人も含まれており、本書はその彼を主人公にしたノンフィクション絵本だ。ブラジルでの経験もふまえ、著者は主人公のルーツであるブラジルの日本移民の歴史や背景も織り込みながら、日本と世界の関係について問いかける。子供と大人両方向けの絵本。

(文芸社 2023年4月 24頁 1,000円+税)

『アマゾン川』

(サングマ・フランシス著、ゆらしょうこ訳、ロモロ・ディバリト絵)

小学校中高学年向けイラスト児童書。英国で出版された原本の翻訳だが、イラストレーターはロモロはブラジル人画家。源流から河口までの大河とその流域の自然環境(とその環境破壊も)、多様な植生や動物相も絵と文章で語り、さらには怪魚ピラルクにまつわる先住民の代表的な民話まで読み込んでいる。世界有数の生物多様性を知るためにも大人が読んでも随分と勉強になる出来栄え。日本版の解説を著名な探検家関野吉晴氏書いている。

(徳間書店 2022年7月 72頁 税込み3,080円)

!!「ブラジルあれこれ」!!

在日日系人のための生活相談員セミナー

3月10日、JICA 横浜で開催された(公財)海外日系人協会主催「令和4年度在日日系人のための生活相談員セミナー」に参加した。この集まりは、日本各地で在日日系人等外国人の生活相談を行っている相談員の方々の活動報告と情報共有の場として今回で20回目を数え、対面開催は3年振りとのことである。相談員の方々に加え関連分野に関心を持つ人の参加も可能で、当協会経由で会員にも案内があった。

筆者はこの数年この会合に参加してきたが、今回の基調講演は、本誌寄稿者でもあるアンジェロ・イシ武蔵大学社会学部教授による「外国人労働市場の変化と在日日系社会の挑戦」と題するもので、法務省による大規模調査「在留外国人に対する基礎調査」の結果を紹介しつつ在日ブラジル人社会の現状や意識調査結果の分析についても解説するなど中身の濃い講演であった。また、同教授は、「在日日系人と起業について」と題した講義も行い、日系人によるエスニック・ビジネスの動きについてその歴史と最近の動きを紹介した。

また、厚生労働省藤井伸章外国人雇用対策専門員より、「日系人・外国人労働者の動向と就労支援について」の講義があり、ハローワークや労働相談窓口の外国人対応について報告があった。

現場からの報告として、愛知県高齢者生活協同組合 ケアセンターほみの上江洲恵子所長より、「外国人住民の高齢化問題について～愛知県豊田市保見ヶ丘団地の事例」と題する講義があり、

同ケアセンターでの種々取り組みが紹介された。

最後に、二宮正人国外労働者情報支援センター理事長より、「日系人の雇用と高齢化～日伯の事例を比較して」と題する講義があった。ブラジルに渡った日本人移住者がまず直面したのは医療の問題であったとして、旧日本病院(現サントクルス病院)建設など日系社会一丸となった取り組みや高齢化する日系社会への対応について、「いこいの園」や「サントス厚生ホーム」等関連施設が建設・運営されてきたことが紹介された。

セミナー終了後アンジェロ・イシ教授に、「在日日系ブラジル人社会に関連し、いま一番危機感を持っていることは何か」と尋ねてみた。同氏の答えは、「エスニック・ビジネス等を通じ日本社会で頭角を現す人材も増えてきていると感じるが、これらの人たちは、日系社会への帰属意識が極めて薄く、気になっている。」という答えだった。また、日系ブラジル人社会の将来展望に関しては、「日本の大学に進学する若者も増え、最近では、日本の司法試験に合格し弁護士になった者も数名いる。日本における日系ブラジル人社会の歴史は、ようやく30年。ブラジルにおける邦人社会がたどった歴史をそのまま重ねることはできないが、このままいけば、日本社会で活躍する日系ブラジル人が益々増えて、日本における日系ブラジル人社会の地歩がさらに強固なものになり、影響力を強めていくことは確実だ。」という答えが返ってきた(二宮理事長も首肯)ので紹介しておく。(MK)

NAGOYAH!!!

VOLLEYBALL NATIONS LEAGUE 2023



バレーボールネーションズリーグ名古屋



Experience more at Volleyball.World



NIPPON GAISHI HALL

日本ガイシホール



女子

男子

5月30日(火)▶6月4日(日) 6月6日(火)▶6月11日(日)



お問い合わせ
公益財団法人日本バレーボール協会
volleyballtickets@jva.or.jp

facebook 公式アカウント
JapanVolleyballAssociation

Instagram 公式アカウント
@jva_volleyball

twitter 公式アカウント
@JVA_Volleyball

LINE 公式アカウント
@japanvolleyball

本大会の開催状況が変更になる場合がございますので、詳しくは日本バレーボール協会のホームページをご覧ください



JVA Official HP
https://www.jva.or.jp/



日本代表と一緒に応援しよう!
2次元コードよりEngage会場で登録後、
祝日NIPPON Gaiishi HallのNIPPON Gaiishi Hall
フェスへ参加します!

祝日NIPPON 火の国NIPPON

日系ブラジル人採用 ～40年以上の実績～

人材で拓く未来のイノベーション

製造請負・製造派遣・技術事業・
人材紹介／紹介予定派遣
業務委託（管理代行）・特定技能登録支援機関
留学生支援サービス



東京オフィス
東京都新宿区西新宿3-2-11新宿三井ビルディング二号館
TEL：(03) 3286-8686 FAX：(03) 5322-2311

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F



Leading You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様に万全のサポートをご提供しています。

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

NISHIMURA & ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon
*1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

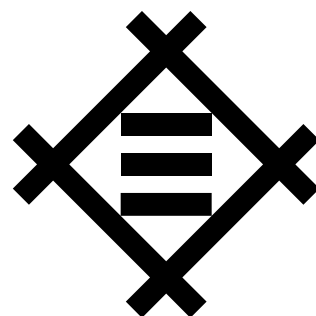
貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、
増産や品質向上に貢献。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.